

第9回「日本語大賞」

テーマ「ちょっと気になる日本語」

中学生の部 優秀賞 受賞作品

別にいいけど…なに？

京都府

京都市立西京高等学校附属中学校

3年 河井 紀乃

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

別にいいけど…なに？

京都市立西京高等学校附属中学校 三年

河井 紀乃

「ちよつと雨雲きそうやし、外に干してある洗濯物たんでくれる？」

台所の湯気のむこうから母の声がする。私は一瞬顔をしかめ、ちよつど佳境に入った本を閉じ立ちあがる。

「別にいいけど。」

外はどんよりしていて雨のにおいがした。部活でかいた汗でベタベタしている体に湿気が重くはりつく。竿からタオルを外し腕にどんどんかける。さつきもう少し明るく返事したほうがよかつたかな。でもしようがない。私だって学校での疲れがたまっている。

「そんなめんどくさそうな返事して顔しかめながらするならもういいよ。後でやるから置いて。」

気がつくと母が目の前に立っていた。

「別にそんなことないけど…。」

「けどなに？ そんな返事されたら頼んだほうも嫌な気持ちになるから。」

「別にいいって。」

私はけどの後に何を言おうとしていたのだろう。最初から言うつもりのない嫌な言葉。その隠れた言葉のもやもやはしばらく消えなかった。

その翌日の移動教室の時。

（あーっ。教室に宿題の入ったファイルを忘れたっ。でも係の仕事もしないといけないし…。）授業時間まであと五分。係の仕事が間に合わないとクラスに迷惑をかけてしまう…けれども、先生が怖くて宿題も取りに戻りたい…。

「宿題忘れた奴はしっかり言いにくること。後になるほど先生もイライラするから早めに来てねー。」

目が笑っていない。どうしよう…。

「ごめんっ。すごい申し訳ないねんけど、教室から私のファイル取ってきてもらってもいい…？」

「別にいいけど…。」

（けど…なに？）

「私も先生に用事があるからその後行ってくるのもいい？」

「うんっ。本当にごめん。ありがとう。」

体から力が抜けた。自分勝手にめんどろな頼みごとなのに。昨日の別にいいけどが使われていても、けどの後に言葉があると隠れている言葉について不安にならず心がすっきりとした。急に頭の中に母の顔がうかんできた。

「ねえ。洗濯物たたんでおいてくれる？」

数日後また母から頼まれた。

「別にいいけど…疲れているから汗が引くまで待って。」

「休憩してからでいいよ。」

前のように別にと無意識に返事をしてしまう。でも、言葉を少しつけ足すだけですつきりするし、楽になる。アイスを食べてリフレッシュ。軽い気持ちで洗濯物をたたむ。お手伝いをするので、台所で汗をかきながら晩御飯を作ってくれている母の仕事量を減らせるのなら。自分の行動が誰かのためになるのはうれしい。

「終わったー？　ありがとう。晩御飯できたよ。」

嫌々するときよりも気持ちがすつきりした。

「別にいいけど…。」には見えないもやもやが隠れている。しかし、厄介なことにそれは無意識に出てしまい、さらには自分でももやもやの正体は分からない。ただ後ろ向きの暗い気持ちが霧のようにかかっている。この霧は相手の心も自分の心も覆ってしまい、私達を暗い気持ちにさせる。

もし、このような頼みごとをLINEの中でしていたら？　私達は「了解!!」というスタンプを送りノリで嫌な気持ちを隠すことができる。確かにこれだと霧は発生せず楽かもしれない。表面的には人間関係も良好になる。しかし、それでは本当の気持ちを伝えたことにはならない。人間だったら頼みごとに対して気分が乗るときも乗らないときもある。そんなときに無意識に出てくる「別にいいけど…」の後ろに何か言葉をつけたら、隠れた霧の正体ははつきり分からなくても頼まれた人も負担が少なくなる。そうしたらお互い本音をよりスムーズに伝えられるのではないか。「別にいいけど…」という理由があるからちよつと待っていてね。」というように。

今回の体験を通して、私は少し何かを足すだけで様々な色に変化する日本語の素晴らしさを知ることができた。このような日本語の性格を正しく理解し、人と人とのつながりを明るくすつきりとさせる言葉を、どんどん活用することを意識していきたい。